



参加者のマーじゃん歴もそれぞれ。中には30年ぶりに打つ人もいた。地元紙に取り上げられた時には、多くの人から激励の言葉が届いた。



## 男はつらいよ

最初から地域の交流に熱心だったわけではない。降旗さんは、仕事で全国各地を転勤し、退職後の平成16年、旧豊科町の奥さんの生家に入った。その3年後、任期2年の地区の公民館長がまわってきた。そしてその後、衝撃的なニュースを耳にする。一人暮らしの高齢女性が被害者となった殺人事件が、自宅から数100メートル離れた所で発生したのだ。

容疑者は、県外出身者で全国を転々とし、仕事で豊科



に住んでいる間に事件を起こしたという。これまで降旗さんが抱いていた安曇野の牧歌的なイメージを覆すような衝撃的な犯罪だった。

——安曇野でも孤独を抱える人が多いのではないかと。

さまざまな経歴を持った人がこのまちを行き交い、暮らしている。そういった人にメッセージを送る必要があると考えるようになった。

降旗さんはまず、地域内での「あいさつ運動」に取り組み。子どもはもちろん、知らない人にも進んであいさつをするよう、公民館報や役員を通じて広く呼び掛けた。相手の存在を認め、知ることが地域を元気にし、防犯にもつながると考えたためだ。

そして、館長2年目となる昨年6月には、健康マージ



指を動かし、3人を相手に、34種136枚の牌の行方を監視し、さらに6けたの数字を暗算で計算するマーじゃんは、脳活性化には最適といわれ、近年注目を浴びている。

ヤン推進隊を発足させる。

この日の参加者みんなで記念撮影。「家族の皆さんも興味を持ち、参加してくれたら理想です」と降旗さん。

「実は私自身、すぐに心を開く方ではないんです。自分のことを一般化して恐縮ですが、男には変なプライドや殻があって、すんなりと打ち解けられない部分があるのではないのでしょうか」と降旗さん。男性は、女性に比べ、地域に知り合いが少なく、口ベタ、社交ベタが多いといわれる。そこで降旗さんは、働き盛りであった時代に、全国の赴任先で、同僚などの親交を深めるために楽しんできたマーじゃんをしようと考えた。

「ゲームに集中することで、会話の『義務感』から解放され、自然に交流も進みます。ある意味でマーじゃんは、スキンシップのあいさつです」。

かくして、モーレツな時代に培った降旗さんのノウハウは、地域づくりにも生かされることになる。

## 場づくりに王道なし

参加者は、マーじゃんを打つことを目的に集まってくる。しかし、このようなプライベートな集まりが、公益性の高い活動に発展することがある。

実は、午後9時の終了後、5000円の交流会費を出し合い、対戦中にはご法度とするお酒を、少しだけ飲む。「時に本音が出たり、地域の話題になったり。近くで起きた事故や事件の話、入院や通院の体験など思わぬ情報を得ることができます。私はこの時間がマーじゃんよりも好きですね」。

実際に交流会では、マーじゃんの対戦の話ばかりでなく、防犯灯の不具合、地区内にある道祖神が傾いてしまったという情報、あいさつ運動を広げていくための話など、同じ地域に住むもの同士、自然と地域づくりの話題に広がった。

「腰が……なんて言いながら皆来てくれる。そういう義理みたいなものもあると思います。ただ、毎回、通知は出しますが、出欠は取りません。押しつけない、がっかりしないことが大事。地域の場づくりに、王道みたいなものはないだろうから」。

ユーモアと読みやすさに気を配った手作りのチラシを、今後も隣人に届けるつもりだ。



## 特集 「場」を求めて

